

子ども記者、地域・朝市をフリペで発信

上越教育大学附属小学校 教諭 水谷 徹平

Teppe.m@gmail.com

キーワード：総合学習、デジタルカメラ、地域連携、情報モラル

1. はじめに

現代社会は核家族化や少子・高齢化、利己的な考えの増加などからコミュニティが消失し、かかわりが希薄になっている。急速に変化する情報化の光と影に、教え込まれた知識や技能では対応できない。体験や実感を通すことで、実践力として機能するのである。

本校がある新潟県上越市は、海、山があり、雪が多く降る四季の変化や自然に富んだ地である。子どもたちは、「じょうえつ.net」という情報発信局を開設し、子ども記者・子どもカメラマンになりきって、デジタル一眼レフカメラと取材手帳を手に、朝市や市内各地に繰り返し訪れ、心の動いたものを取材して、フリーペーパーにまとめるという活動を行った。

体験とかかわった言語活動の充実によって、情報活用の実践力と情報モラルを育んだ実践を紹介する。

2. 実践の過程

(1) 子ども記者誕生

春、3年生38人との学級開き。昨年担任した子のきょうだいや、始業式で写真を撮る姿から「先生ってカメラマンだね」「僕たちも使わせてもらえるのかな」との声。「みんなもカメラマンをやってみる？」と投げかけると大喜び。渡したカメラを手に、早速外へと飛び出し、子ども記者としての活動が始まった。

学校脇の原っぱは、まだところどころ雪が残る枯れ野原。しかし毎日遊んできた馴染みの場所である。「あ、こんな春を見つけた！」と、フキノトウやツクシ、桜のつぼみを探し出していく。50mmマクロレンズを付け、腹ばいになってシャッターを切っていた直樹さん。「上手に撮れた」と見せてくれたフキノトウの写真をプレビューしてビックリ。「フキノトウって、この一つ一つが花なんだ！」興奮して友だちにも教える。

取材手帳にスケッチする子、理科室に虫がねを借りに行く子、プレビューを拡大して見る子と大騒ぎ。早速、特ダネスクープを見つけたことができた。

(2) 朝市を訪れて季節を感じる

取材を重ね、取材カードもたまってきた子ども記者。桜咲く高田公園取材や、駅前の本町取材を経て、二・七の付く日に開かれる朝市に行くことにした。

店先の彩り鮮やかなお花屋さんに、山の幸を売っているお店、キムチ屋さんに果物屋さん。面白そうなものを次々見付け、手帳に描いたり、写真を撮ったりしていく。見たことのない山菜を見つけた誠人さん、「これは何ですか？」と、早速、お店の人にインタビュー。

お店の人：これはね、イタドリという山菜だよ。
誠人さん：おじさんが採ってきたんですか？
お店の人：そうだよ。これくらいの大きさだと、柔らかいからおいしいよ。
誠人さん：もっと大きくなるんですか？
お店の人：そうだね。2m位になるけれど、大きくなると固くなっちゃうんだよ。
誠人さん：すごーく、大きくなるんだね。
お店の人：春の芽とも言うね。茹でて食べるときつと春の味がするよ。

一人300円ずつお家の人からもらって出かけた朝市取材。誠人さんは、春の芽イタドリを買うことにした。フキノトウやコゴミ、タケノコなどを買ったり、枝で売っている桜を買ったりと、思い思いにお店の人とのコミュニケーションをしながら買い物を楽しむ。イタドリやコゴメは、教室で天ぷらにして味わった。

(3) 特ダネスクープを伝えたい

朝市に出かけ、取材や買い物を重ねる中で、たくさんものものを取材してきた。学級でワラビ、新ジャガ、トマト、トウモロコシ、タケノコ、梅から作った梅ジュース、栗にメロンやスイカなど旬を味わってきた。「いつも優しく接してくれる朝市の方やお家の人に、自分たちが見つけたものや心が動いたことを伝えたい」という声からフリーペーパーをつくることにした。

いつも通う朝市の花屋さんで、ピンクでふわふわの白い花を見つけた沙耶さん。ケイトウの仲間、猫の尻尾に似ている形なのでキャットテールという名前だよ」と教えてもらった感動を、トップ記事に選んだ。

撮った写真を貼り、見出しや本文の内容を考えて、「変わったお花や優しいお店の人との話が楽しい朝市の花屋さんにぜひ行ってみたい」と、自分の考えを記して、カラーコピーして渡しに行った。

「上手に書いたねえ」と褒められ、お店に貼ってもらって満面の笑み。フリーペーパーにまとめることで、客観的な情報と、自分の思いや考えの双方を再認識し、人、もの、ことへのとらえを確かにしていった。

(4) 伝えるためのブラッシュアップ

タウン誌「新潟 komachi」の編集部長井上さんを招き、読む人の心をつかむコツを考えた。

誠人さんが書いたフリーペーパーのトップ記事は上杉謙信の居城春日山で見つけた大砲。赤錆びた大砲に興味をもったものの、聞く人もおらず、近くにあった石碑も難しい崩し字で、由来が分からない。撮った石碑の写真を大学の先生に見せたり、ウェブページや本で春日山にある大砲を調べたりする中で、日露戦争でロシア軍から鹵獲(ろかく)した砲であると分かった。誠人さんは、レプリカだと思っていたのに、本物であることに驚く。見出しは「レプリカかな？本物かな？」。内容を端的に表わすのではなく、読みたくなるキャッチコピーにしたのである。「写真をトリミングして、大砲の迫力をふやすといいよ」「行き方の地図も描くといいんじゃない？」「本当かどうか確かめないと見た人に悪いね」と、よいところやアドバイスを交流し、様々な立場の人が読んだ時、どうすれば心を動かし、正しい情報を伝えられるかを考えた。

「記事を書いてみる？」という井上さんの言葉から、雑誌の記事も書くことになった。学級全体で何を書くか考えた春・夏の記事は、沙耶さんの取材したキャットテールを題材にした。写真や言葉、キャッチコピーを選んだ誰でもお店の人と気軽に話せる朝市」。自分たちの記事が本屋さんで売っている雑誌に載っているのを見て、子ども記者は大喜び。

地域や社会とかかわり、上越市のよさをたくさんの人に伝えられる充実感を得ていた。

(5) お出かけ取材でもっと上越を感じよう

朝市以外にも、自分たちで下調べをし、取材計画を立てて、バスや電車でのお出かけ取材に行っている。「春日山なら、自然も多いし、謙信公のことが調べられるよ。バスなら15分くらいで行けるし…」、「ゴーカートや遊具、SLが取材できるし、もし雨が降っても青少年文化センターに行ける」「夏なんだからやっぱり海でしょ！海も水族館、港も取材できるよ」などと主張し、学級でコンペティション。勝ち抜いて行きたい場所に行くために、場所のよさや取材対象、季節との関連などを必死で調べ、地図やパンフレット、時刻表を見せながら、プレゼンテーションを行う。

7月のお出かけ取材は直江津。水族館でイルカショーに参加し、お昼ご飯を佐渡汽船ターミナルで食べながら、フェリーの入港や火力発電所を写真撮影、直江津海水浴場ではカニや貝殻取りをたっぷり楽しんだ。

他にも、日本三大夜桜の名所高田公園、上杉謙信の居城春日山城跡、五智公園、シーサイドパーク、うみてらす名立、鶴の浜温泉街、さけのつかみ取りなどへ出かけた。自分の住む市の豊かな自然や観光名所、名産を味わうとともに、交通網や物流、産業、市街地と郊外の違いを自然に感じるようになっていった。

(6) 情報発信で気を付けることを考える

11月、30回以上朝市を訪ね、書いたフリーペーパーも8枚を数える頃、子ども記者は朝市のものでなく、人にも興味が向いていた。コンペの末、新潟komachi 12月号の記事に選ばれたのは、朝市に焼きたてのパンを出しているトダラバパンの山田さん。「実際に食べ比べをして味について書こう」僕たちが食べている写真も加えよう」と取材を重ね、細かい文章を直した。締め切り前日の日曜日にも取材しに行き、雑誌に載ること、記事はこれでいいかを山田さんに確認して、文章を推敲した。限られた文字数の中で、キャッチコピーと本文、写真を選んだ。店名の由来や紹介するパンの説明は、トダラバパンでもらったチラシを参考に書いた。朝市を訪れたくなったり、訪れたお客さんが食べたいと思うような記事にしようとするとともに、販売される雑誌の記事に間違いがあったり、誤解を招いたりするような表現があった時、どうなるかを考えた。自分たちの信頼が落ちるだけでなく、「新潟komachi」の井上さん、トダラバパンの山田さんのイメージが悪くなったり、売上げが落ちたりすることを想像して、記事を考えて。

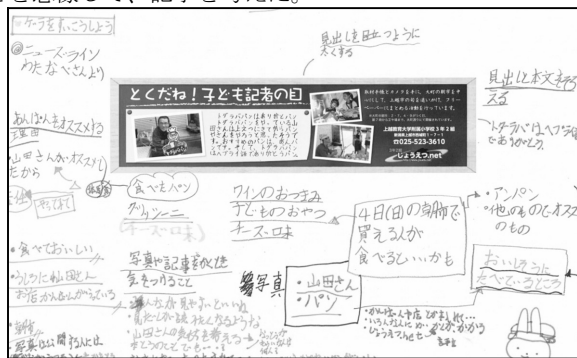


写真1 雑誌の記事推敲から情報モラルを育む

関わりを深めた人の記事を雑誌に掲載する体験により、情報発信を行うことは読み手を意識するだけでなく、書かれた人の気持ちや情報の信頼性を意識する等“情報発信の影響”を考える素地を育むことができた。

3. 実践における子どもの学び

(1) 地域のよさ、人のあたたかさを実感する

年間を通して40回以上訪ねた朝市。フリーペーパーをお店に飾り、おまけをしてくれるお店の方も多し。子どもたちは朝市やお店の方が大好きになった。

また、バスや電車で行く「お出かけ取材」では市内の各地を巡り、郷土に対する愛着を膨らませた。

子どもは四季や自然の恵みが豊かな地域のよさ、そこで育まれた人々のあたたかさに気付いていった。

フリーペーパーや地域誌とタイアップして子どもの写真や記事を発信することから、地域が活性化したり、朝市の人が喜んだりする充実感を味わった。

(2) ファインダーを通すことでみる行為が深化する

一眼レフカメラを持った取材で、ものをみる目が、細やかになったり、変化を感じたりするようになった。ファインダーからものや風景をのぞき、時間と空間を切り取ることで、対象の認知が深まっていく。また、写真を軸に、見出しや本文を加え、ブラッシュアップしてフリーペーパーにしたり、写真と詩をコラボレートさせたりしてきた。思いや考えを再構成して視覚化し、発信することで、同じ対象に対しての論理的思考と感性をかかわらせてはたらかせることにつながった。

(3) 取材から記事化のプロセスで

撮りためた写真や感想カード、インタビューから、月1のフリーペーパー作成や、地域紙「にいがたkomachi」への季節ごとの記事掲載を重ね、言語活用力や情報活用の実践力を高めた。見出しと写真、本文を組み合わせ、正しく情報を伝えるとともに、どう読者が読みたい記事にするかという試行を、経験とフィードバックで重ねてきたからである。また、通っている朝市の人というプライベートな事を雑誌への記事掲載というパブリックな発信へと経験をつなげた。お店の人の顔やお客さんを思い浮かべ、情報の信頼性、著作権や肖像権など、情報発信に対する責任や社会への影響を体験的に感じ、様々な立場に立って情報への考えをつくった。

4. おわりに

子ども記者は、写真やフリーペーパー、詩や雑誌の記事で感じた地域のよさや人のあたたかさ、季節の移ろいを表現・発信してきた。情報の発信とフィードバックを重ね、情報量や即時性などメディア特性を実感するとともに、世の中にあふれる情報は編集やまとめ方で多分に発信者の意図が含まれることを感じ、主体的に情報を読み解くようになった。体験を通して感じ、考えたことをまとめ、地域や季節とのかかわりを意味付けするとともに、必要な情報を主体的に収集、判断、表現、処理、創造する活動を繰り返し、受け手の状況や思いを踏まえた情報活用の実践力、実践的な情報化社会に参画する態度が育まれた。

体験を基にした子ども発の学びは、深く根を下ろす反面、場当たりの必要となると必要な内容を網羅できない。3年生における情報活用力を教師が思い描き、子どもの体験場面から感度高く考える場を設ける必要がある。

小学校段階での情報活用力育成には、顔と顔が見えるかかわりのよさをたっぷり感じる事が大切である。3年生の行動力と自発性を十分に発揮させ、実感あるコミュニケーションを重ねることで、高度に情報化された社会の中でも、顔の見えない相手へ思い馳せることができる素地が育まれると考えている。